

『極研～惑いの氷華～』

著：水月真兎

ill：明神 翼

(立ち聞きするつもりなんて、なかったのに……)

いくら気心の知れた間柄でも、だからこそお互いの濡れ場に出くわすのはひどく気まずい。ましてや孝史には、欲情に掠(かす)れて烈を呼ぶ正宗の声は一番聞きたくないものだった。

音を立てそうな勢いで爪先から血の気が引いていく。硬い床の上なのに妙にふわふわとして力の入らない足がふいにもつれ、冷たい廊下の壁に無防備な背中がトンと当たると。

その場にくずおれてしまいそうな脱力感をかろうじて堪(こら)え、ぐらつく上体を支えた。すぐにここから離れたいのに、今は動くことさえできそうにない。

わかっていたはずだ、最初から。孝史が初めて正宗と出会った時から、彼の目は烈だけを見つめていた。

唯一の肉親だった敬愛する父を亡くし、生きる希望すら失っていた正宗を、きつく抱きしめて救ったあたたかな両手。無(む)垢(く)な微(ほほ)笑(え)み。あの時から、正宗は烈のものだった。

(一番近くで見ていた俺が、誰よりもよくわかっていたはずなのにな……)

諦(あきら)めるしかないのと、何度も自分に言い聞かせた。なのに気づくと、物欲しげなまなざしで正宗の一挙手一投足を追っている。

そんな自分が惨(みじ)めで、あさましくて、大嫌いだった。

いっそ、ままならない心ごと自分の存在まで消してしまいたいと願ったことも、一度や二度ではなかった。

祖父から『藤和会』組長を継いだ烈のもとに正宗が帰ると決心した時、一人でニューヨークに残るべきだったのかもしれない。

日本へ帰れば、お互いに身も心も必要としている二人がいずれこうなることは、たやすく予想できたのに。

こと恋愛には初(う)心(ぶ)で奥手な烈に対して、自らの持てあますほどの劣情を恥じ、告白することすらできなかった正宗に、「卑(いや)しい感情を隠して忠義面(づら)した卑(ひ)怯(きょう)者(もの)」となじり、けしかけるような真似さえした。

本当の卑怯者は孝史のほうだ。あの烈が正宗の一(いち)途(ず)な想いを拒むわけがない。踏み出しさえすれば、正宗はいつでも幸せになれた。

でもそれは、正宗が烈を想うのと同じ時間、彼を想い続けてきた自分の恋の終わりにもなるはずだった。

(どうしてっ、俺は……)

親友と呼ぶ男への歪(ゆが)んだ執着を断ち切ることができない。自分の感情がひどくおぞましいものに思えて、怖くなる。

頬(ほお)を伝う間に冷えた涙がフローリングの廊下に落ちる。その染みをぼんやり見つめていると、突然腕をつかまれた。

「大……」

「シッ！」

いつの間にか孝史の側まで近づいていた大希は、黙っていると人差し指を唇の前に立てて見せる。

三つ年下の大希は、工学部の一年生だ。切れ者の正宗や孝史の側で育ったせいで、早くから学力には見切りをつけ体力の向上に励(はげ)んで、留学中は語学と基礎教養を習得し終えると傭(よう)兵(へい)部隊に入ってしまったタフガイだった。

短くした髪も瞳も深いこげ茶色で、切れ長な二重の目も涼しげに見える。日本人らしくない容姿に生まれついてしまった孝史は、いつもうらやましく思っていた。

いきなり現れた大希に、涙を隠す暇さえなかった。そんな気遣いすら忘れていたというべきかもしれない。

見開かれた孝史の瞳にあふれる涙に気づいて、大希は息を呑(の)む。そのおもてに、滅多に見せないような苦い笑みが浮かんだ。

「バカだな……」

「ごめん……」

言い訳のしようもなかった。大希は、いっしょに育った正宗へ孝史が抱いてきた叶(かな)うはずのない思(し)慕(ぼ)を知っている。

情けないほど動かない足で、大希に抱(かか)えられるように廊下を戻りながら、消え入りそうな声で謝った。

「謝るなよ。氣い遣いすぎなんだよ、おまえは……」

だから聞きたくないものまで聞くはめになるんだと咎(とが)められて、(氣を遣ってるのは、いったいどっちだ?)と心の中で問いかける。

「落ち着くまで、俺の部屋にくるか？」

廊下の左にあるのが大希の私室だった。ドアの前に立ち止まった彼にまだ心配そうに訊(き)かれ、孝史はそっと首を振った。

「一人に、してくれ……」

逃げるように身を翻(ひる)がえし、廊下の右奥にある自分の部屋の扉を開く。後ろから強引にすべり込んでくる長身に、驚いて視線を上げた。

「大希……？」

「やっぱりだめだ。一人にしたら、おまえ、よけいに落ち込むだろう」

「出ていけっ……」

大希の顔を、まともに見られない。俯(うつむ)いたまま震える声を絞り出した。

「聞けないな」

「大希っ！」

素っ気ない返事を聞かされ、思わず睨(にら)み上げた孝史を、大希はいつになく鋭いまなざしで見下ろしてくる。

その逞(たくま)しい両腕に無理やり抱え上げられて、離せと力なく身をもがいた。

「暴れるな。落っことすぞ」

「離せっ！」

「俺が傷ついてないとでも思うのか？」

「だったら……」

なおさら、顔を見るのだって嫌じゃないのかと大希の表情をそっと窺(うかが)った。彼

には珍しい冷たい目つきを向けられ、ズキンと胸が痛む。

「……どうして？」

「腹が立ったら、よけいやりたくなつた……」

ムツとした声音のまま言われた正直すぎるその欲望に、孝史は呆(あつ)気(け)に取られ、小さく嘔き出した。

「ほんとに、おまえは……」

「どうせ年下のガキだよ。だから……わがままぐらい付き合えよ」

「バカ……」

わがままなんかじゃない。これは自分を慰(なぐさ)め、痛みを忘れさせようとする、大希のやさしさだとわかっている。わかっているから、拒めなくなる。

でも、やさしい男の腕に抱かれればもっとつらくなることを、大希は知っているだろうか。

(ひどい奴だよ、おまえは……)

諦めて力を抜き、孝史は懐(なつ)かしい匂いのする熱い胸に顔を埋(うず)めた。

本文 p11～16 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>